

◆小袖の美

小袖とは、袖口の小さい着物という意味で、現代のキモノの原形となるものです。

本展示では、八代城主松井家の女性たちが着用した小袖や打掛など12領を展示します。
我が国の染織文化の豊かさを見ることができる美しい小袖の数々をお楽しみください。



◆御所解文様・・・武家の女性たちが好んだのが、御所解文様と呼ばれるデザインです。これは風景の中に『源氏物語』や『伊勢物語』、能楽や和歌など、文芸にまつわるモチーフを隠したもので、武家の教養と美意識を示しています。

◆立木文字文様・・・裾から背中にかけて植物が立ち上がる「立木文様」に和歌や漢詩の文字を配した「立木に文字」文様も武家女性に好まれた意匠です。

◆総模様の打掛・・・御所解文様と並んで、武家女性の衣装に典型的なのが、花束文様と、卍字繫や七宝繫、立涌などのいわゆる有職文様を段替りに配した総模様の打掛です。秋から春にかけての武家女性の礼装として着用されました。

◆拝領小袖・・・松井家には、徳川家の三つ葉葵紋や細川家の九曜紋などの他家の家紋をつけた小袖も伝来しています。これらは「拝領小袖」とも呼ばれ、腰から下に文様をつけた「中模様」です。拝領品として、大切に保存されてきたものです。

番号	作品名	番号	作品名
1	浅葱地屋形に箏文様小袖	9	萌葱地龍頭船に鴛鴦文様小袖
2	萌葱地土橋に巻物文様小袖	10	浅葱地八橋文様振袖
3	紫地菊に筆硯文様小袖	11	萌葱地唐冠に屏風文様小袖
4	紅地御所車に蓑笠文様小袖	12	薄黄地水草裾文様帷子
5	浅葱秋草に虫籠文様小袖	13	紅地藤に燕文様掛下帯
6	白地立木に文字文様帷子	14	白地籬に菊文様金襴提帯
7	紅地牡丹菊に羽団扇文様打掛	15	紫地地杜若文様腹掛
8	白地中啓に花束文様打掛	16	衣装注文帳



1 浅葱屋形に箏文様小袖（縮緬地・綿入）

全体に文様のある「総模様」の小袖は、身分の高い武家女性が正装として着用したものです。

菊や桔梗、萩、藤袴といった秋草が茂る中、屋形の中に箏が置かれています。登場人物の姿はありませんが、『平家物語』に出てくる恋物語で、箏の名手小督を、彼女を愛する高倉帝の使者源仲国が見つけ出す場面を表しています。能「小督」としても知られる名場面。

物語：小督を愛する高倉帝の妃は平清盛の娘徳子。清盛の怒りがあった小督は帝にだまって身を隠します。帝の命を受けた源仲国は嵯峨野で小督が帝を想って弾く「想夫恋」の箏の音を耳にし、彼女を見つけ出すのです。



2 萌葱地土橋に杳文様小袖（縮緬地・綿入）

下方にかかる土橋に、巻物と轡（手綱をつけるため、馬の口に噛ませる金具）が置かれ、杳が流れています。これは、中国の高名な軍師張良が、老人（黄石公）から秘伝の兵法書を授かった逸話を表しています。老人は杳を拾わせたりして張良を試しますが、動じない張良を気に入って兵法書を与えます。能「張良」という曲もあり、武士好みの文様といえます。



3 紫地菊に筆硯文様小袖（縮緬地・綿入）

全面に菊が咲き乱れる中、下方に屋形、筆、硯、唐団扇が置かれています。

これは、中国の皇帝・穆王に仕えた少年が、皇帝の枕をまたいだ罪で山中へ流され、菊の葉に法華経を書いて、川に流したところ、葉から滴る雫が不老不死の薬となり、以来年をとらない仙人になったという「菊慈童」の話を表しています。

能「菊慈童」として知られており、八代妙見祭の笠鉾の一つが「菊慈童」の人形を笠上にのせています。



4 紅地御所車に蓑笠文様小袖（縮緬地・綿入）

背面に桧扇と短冊、枝折戸、前身頃左裾に御所車と蓑・笠が表されています。

これらは、平安時代の歌人で、絶世の美女といわれた小野小町と、小町に恋をして「百夜通い」をした深草少将を表しています。雨の夜も雪の夜も通い続け、99日目に思いを果たせぬまま死んでしまった深草少将の悲恋は、能「通小町」という曲で、よく知られたものでした。



5 浅葱地秋草に虫籠文様小袖（紵地・単衣）

紵は、緯糸の間に隙間を生じさせた夏用の織物です。

背面に屋形、虫籠があり、『源氏物語』第28帖「野分」を表します。ある野分（台風）の日、光源氏の子夕霧が、風で持ち上がった御簾の向こうに継母紫の上を偶然見てしまい、その美しさに心乱されるという印象的な出来事がある帖です。

白揚で表された秋の草花（菊・萩・桔梗・女郎花・撫子）が大振りでのびやかに表現されています。白揚と刺繍だけで表されているため、すっきりしていつそう涼しげにみえます。



6 白地立木に文字文様帷子（麻地・帷子）

麻製で裏地のない小袖を帷子といいます。裾から背中にかけて植物が立ち上がる「立木文様」に和歌や漢詩の文字を配した「立木に文字」文様も武家女性に好まれた意匠です。本品は、薔薇の立木に「鶴の子[]千代をことぶく花なれば齢[]祝ふ萬歳のかめ」という和歌が刺繍されています。

※[]はもともと振袖だったのを袖詰してあるため切れています。



7 紅地牡丹菊に羽団扇文様打掛（綸子地・袷）

御所解文様と並んで、武家女性の衣装に典型的なのが、本品のような花束文様と、卍字繫（紗綾形ともいう）や七宝繫、立涌などのいわゆる有職文様を段替わりに配した総模様の打掛です。秋から春にかけての武家女性の礼装として着用されました。

本品は、絞り染の一種で大変手間のかかる鹿子絞が用いられた一領です。



8 白地中啓に花束文様打掛（綸子地・振袖・綿入）

菊・牡丹・杜若・梅・葵の花束文様、七宝繫、吉祥文入の中啓を配した振袖です。

小さな水玉文様に見えるのは、「型匹田」といい、型紙を用いて文様を表したものです。鹿子絞の代用として開発された技法ですが、「鹿子絞」とは違った魅力があります。

振袖は、未婚女性が着用したもので、結婚後は袖を詰めて、着続けることもありました。



9 萌葱地龍頭船に鴛鴦文様小袖（紹地・衿）

『源氏物語』第24帖「胡蝶」にもとづく文様で、龍頭の船は光源氏が新居六条院で催した船楽の宴を表し、桜と山吹は紫の上が秋好中宮に贈った春の花を表しています。

本品には、三葉葵紋がついており、細川家11代斉樹（1789～1826）の夫人紀・蓮性院（一橋家出身、1785～1861）からの拝領品と思われます。



10 浅葱地八橋文様振袖（紹地・振袖・衿）

杜若、橋、冠と桧扇は、『伊勢物語』第9段にもとづく文様で、主人公の男（在原業平といわれる）が、東国への旅の途中、杜若の名所として知られる三河国八橋を訪れ、「かきつばた」の五文字を用いて旅情を詠んだ場面を表しています。

肥前鍋島家の家紋である杏葉紋がついており、細川家14代護久夫人宏（1851～1919）からの拝領品と思われます。



11 萌葱地唐冠に屏風文様小袖（紋縮緬地・綿入）

桜に立湧文様という華やかな地紋の入った縮緬地に、丸みのある袖、長い裾など、最先端の流行を取り入れたと思われる一領で、細川家の家紋である九曜紋付がついていることから、細川家からの拝領品と思われます。

屏風・唐冠、琴・軍配があり、秦の始皇帝が刺客に襲われるも、花陽夫人の琴の演奏に窮地を救われる能「咸陽宮」を表しています。



12 薄黄地水草裾文様帷子（麻地・帷子）

襟先から裾にかけて文様を配した帷子。杜若・水葵・沢潟・芦などの水草と波文がシャープな表現力で表されています。色数の少ないことが、それぞれの色合いを引き立て、とくに金と藍の色が際立っています。

紋所には、三つ巴形になった桐紋を染め出しており、これは、松井家の内々で用いられた替え紋のひとつです。

13 薄黄地水草裾文様帷子（紋縮緬地） 打掛の下に着る間着に締める帯

14 白地籬に菊文様提帯 打掛を着用しない期間に衿や帷子の上に締める帯

15 紫地杜若文様腹掛

16 衣装注文帳 文政13年（1830）～安政2年（1852）にわたる松井家の衣装注文記録